

農業・農村生活と共に変わる衛生害虫

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	池内, まき子
巻/号	53号
掲載ページ	p. 21-28
発行年月	1983年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農業・農村生活と共に変わる衛生害虫

※
池 内 まき子

1. 農業と生活環境のかかわり

敗戦前後の日本は食糧不足の時代だった。国も開拓・干拓などによる農地造成や土地基盤整備を最大の事業としてとりあげたが、戦争による農地の荒廃、外地からの引き揚げなどによる急激な人口増のため、満足できる食糧確保は困難をきわめた。各家庭では庭先のわずかな空地を見付けては耕し、芋や豆類を育てた。これらの畑には尿尿が肥料として散布され、畑土壌はことごとく寄生虫卵で汚染されていった。このため、農地で働く農民、土まみれになって遊ぶ幼児の寄生虫、とくに回虫感染率は70%以上に達していた⁵⁾。駆虫薬投与によって一時的に駆虫されても、寄生虫卵による汚染環境のなかでは、土から、野菜からの限らない侵入で感染がくり返された。小・中学校あるいは事業所の検査・駆虫による対策のほか、厚生省は改良便所の奨励、殺卵剤の開発などにより寄生虫卵の撲滅をはかった。

昭和35年を過ぎる頃になって寄生虫感染率は全国的に急速に低下していった。これは数々の寄生虫対策の効果もさることながら、国内で生産される低廉な化学肥料と、畜産振興にともなって潤沢に供給されるようになった厩肥が尿尿に代わったこと、また、各種農作業機械の導入、除草剤の普及による手労働からの解放など、農業技術のいちじるしい進展に負うところが大きかったと考えられる。

農業技術の進歩は、このように期せずして農民の、そしてひろく国民の健康に貢献することになった。しかし、一方では新たな問題を引き起しつつあった。化学肥料の多量施用で農作物の病害虫の多発を促し、これが農薬の多投を招いた。畜産振

興によるウシ・ブタ・ニワトリなどの多頭羽飼養は、ハエ・カ・ネズミの多発と、糞尿・騒音などの公害要因を産みだした。

先年、日本脳炎の流行が盛んであった時、ある著名な大学教授から「農林省はコメをつくってヒトを殺している」という手きびしい指摘を受けたことがあった。つまり、水田からは日本脳炎を媒介するコガタアカイエカが多発しているにもかかわらず、イネに被害のする害虫防除は一所懸命だが、このカに対してはなんの手段も講じていないことを指摘されたわけである。作物の病虫害は農林省、人間の病気は厚生省といった縦割り行政に対する苦言であるとも解される。農水省のなかで、働く農民、農村で生活する住民の側にたった研究を重ねてきたつもり私にとって、この言葉は今も心の底に残っている。そして農業が生産性の向上・安定を目標に進展してゆくなかで、生活に、生命に危険・危惧を感じることがあるならば、積極的にこの解決に取りくんでゆくことが、今後の農業研究に対する課題であると考えている。

2. 農業と衛生害虫

衛生害虫とは人体あるいは人の生活に衛生上の害を及ぼす昆虫類で、伝染病の媒介、吸血・刺咬・寄生・不快感を与え、人の肉体的精神的に健康な状態を妨げる原因となっているものの総称である。ハエ・カ・ノミ・シラミ・ゴキブリなどを含んでいるが、この他にダニ・ネズミ・ヘビ・寄生虫などを加えて、衛生動物あるいは医動物とも呼ばれる¹⁷⁾。

これら衛生害虫には農業と密接な関係をもって繁殖しているものが多い。なかでも家畜飼養上家

※ (いけうち まきこ・農業技術研究所)

畜害虫といわれるものは、人畜共通の病気をもつことから人との関連が深い。家畜に寄生したり吸血するアブ・サシバエ・カ・ダニ類、家畜の飼養にあたって堆厩肥や汚水などから発生するハエ・カ・コウカアブ、家畜の飼料を餌とし、家畜舎を荒すゴキブリ・ネズミなどは、すべて人体に衛生上害を及ぼす衛生動物である。これらの衛生動物は、そのほとんどが家畜を飼養することに依存して増殖している^{2), 3), 11)}。

一方、農村にひろがる水田、そしてこれを維持するための水系・肥料・農薬などは、コメの生産性向上の反面、衛生害虫であるカ・ヌカカ・ユスリカなどに豊富な水、栄養源となる肥料、天敵のない好条件を与えることになっている。

このように、農業はコメをつくり、家畜を飼うという過程で多くの衛生動物を増殖させ、人畜共通の病気媒介に、そして快適であるべき生活に幾多のひずみをもたらす原因をつくりだしているわけである。

3. 家畜の飼養とハエの発生

家畜の糞便からは多種のハエが多数発生する(表1)^{11), 15)}。とくにブタの糞便はイエバエ幼虫にとって好適な餌である¹²⁾から、もっとも重要な発生源となっている。イエバエによる害はチフス・赤痢など消化器病の細菌、諸種の寄生虫、結核菌、小児麻痺のウイルスなどを機械的に伝播する可能性の大きいことに加えて、これが住宅内に入り、食物や人体にとまることによる不快感・不潔感である。最近では、とくに後者の被害がクローズアップされてきている。

イエバエの成虫は砂糖水・牛乳・おもゆ・豚・魚肉汁・果実汁・日本酒など人の食物を好んで摂取する(図1)¹⁰⁾ため、住宅内に飛来、夜間も天井などで休止するなど、もっぱら住宅を活動の場

としている。このため、家の近くにブタ小屋がある場合にはイエバエの飛来数が多く、また、幼児のいる家は出入りはげしく開放的であったり、食物が手近にあるなどによって、飛来するハエの数が増加する¹³⁾。ハエを防ぐには網戸をたてる、ハエたたきをつかう、ハエ取りリボンをつるすなどの方法はあるが、なんといっても発生源となっている家畜の糞尿の処理が肝要である。家畜の生死に関与しないからといって片付けられることなく、家畜の飼養にあたっては、その管理技術にハエの発生制御が必ず考慮されるようにしたい。

昭和30年以降、ブタ・ウシ・ニワトリの飼養頭数が急上昇する反面、1～数頭を戸別に飼育する農家が減少し、経営は急速に多頭化の傾向を示した。このため、畜産農家と非畜産農家ははっきりと分離し、家畜飼養によって生ずるハエの問題が、これら農家間に加害者と被害者という異なる立場をもたらした。畜舎からでる多数のハエが、近隣の非畜産農家へ飛んでくる¹³⁾。しかし、非畜産農家は家畜の堆厩肥をもらっているのに、ハエの苦情を直接いうことができない、などの複雑な人間関係が各地で起った。また、農村地域への非農家の移住によって混住化の進んでいる場合には、利害が判然としているので、ハエの問題も畜産公害としての論争的になることもしばしばである。

家畜飼養によって生ずるハエの多寡は、飼養管理に左右されているといっても過言ではない。東京都内で飼養管理の異なる4戸の養豚農家の調査¹⁴⁾から、畜舎および住宅内のイエバエの飛来数を表2に示した。No. 1の農家の飼養方法はもっとも原始的で、ブタの食べ残した餌や糞便は、つねに敷地内に堆積し、野ざらしにされていた。No. 2の農家は、排泄物の液体部分はメタンガス発生槽に入れてメタンガスとして利用し、固形部分は密

表1 家畜糞便から発生する双翅類 (農水省畜試:1962)

家畜名	発生数					計
	イエバエ	オオイエバエ	ヒメイエバエ	サシバエ	その他	
ウシ	213	3	0	164	1,161	1,541
ウマ	915	296	0	0	517	1,728
ブタ	4,332	411	77	86	635	5,541
ヤギ	374	107	0	150	794	1,425

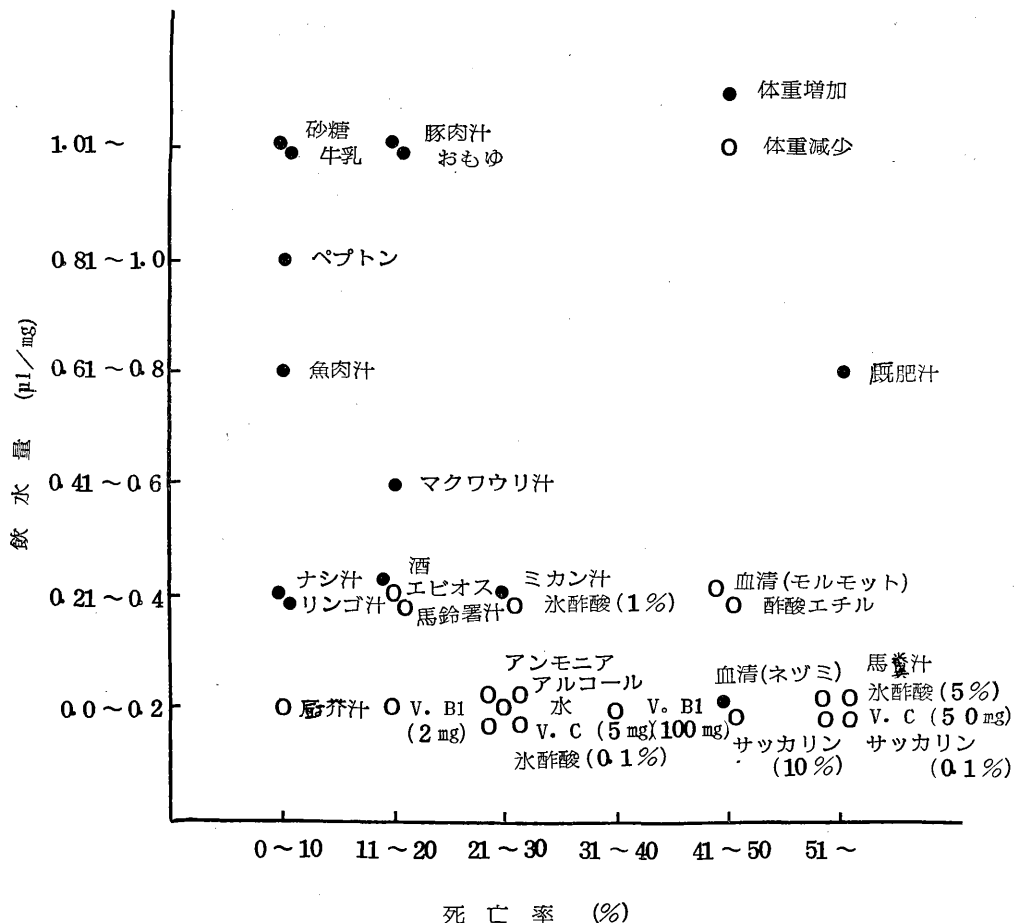


図1 各種の餌を与えたときの飲水量・死亡率及び体重の変化

表2 ブタの飼養管理とイエバエの飛来数 (東京都内養豚農家: 1964)

農家番号	飼養頭数	糞尿処理法	豚舎の清掃	豚体の汚染	殺虫剤の使用	イエバエ数		
						豚舎	住宅	計
1	120	貯溜, 堆積	不良	不良	なし	491	2,896	3,387
2	230	貯溜, 焼却	良	良	使用	131	364	495
3	220	貯溜, 運搬, 鋤込み	やや不良	不良	使用	61	434	495
4	220	貯溜, 運搬, 鋤込み	やや不良	良	なし	430	242	672

閉したガラス室内で乾燥後、焼却するという方法がとられていた。No. 3 および No. 4 では、処理は完全とはいえないが、ある程度衛生的な配慮がなされ、排泄物は一時的に貯溜しても、ほぼ1週間位で畑に運搬、鋤き込むという方法がとられていた。

このように、ハエの数、とくに住宅内のイエバエの飛来数は、ブタの糞尿あるいは餌の食べ残しを敷地内に堆積、放置するか否かによって大きく

異なっていることがわかる。ウシ・ブタ・ニワトリなど家畜の飼養にあたっては、各種のハエの発生源となる糞尿、餌、そして堆厩肥などの管理が十分に行われなければならない。堆厩肥あるいは糞尿の処理に関しては、密閉堆肥舎・堆肥盤・ビニールカバー¹⁾をはじめ、糞の乾燥・焼却、生物処理など研究面でも着実な進展がみられている。ハエは人に被害をもたらすばかりでなく、家畜に対しても吸血による血液損失⁶⁾や、強い不快感か

ら、これを忌避するための全身的な行動⁷⁾が、その生育に影響を与えていることも明らかにされている。

4. 農村環境での力の発生と増殖

ひと昔前まで夏の風物であった蚊帳は農村でもまったくみられなくなっている。たまに飛んできたカは殺虫剤で一吹きすると、カ取線香をたけばことたりる。農村にはカがいなくなったのだろうか？ そう思ったら、夏の夜8時から9時頃、暗くなったウシ小屋へでもブタ小屋へでも懐中電灯をもって行ってみたい。ウシやブタの体には、たくさんの小さなカがとまり、次第にお腹が赤くふくれてくるのを見ることができよう。カ最盛期の頃には、1晩に数千匹ものカに吸血されているウシやブタも例外ではない¹⁹⁾。こんなにカがいるのに、何故家のなかに入ってはこないし、人があまり刺されないでいられるのだろうか。それは、農村にいるカの種類や発生場所が変わってきたためである。

カはわが国ではおよそ100種が生息しているといわれている¹⁶⁾。しかし、私達の目にふれ、かゆい思いをさせられるものの数はそれ程多くはない。いままで、家のなかに入ってきて、人を刺し、朝方満腹して飛べないで部屋のうす暗い壁に止まっていたのはアカイエカである。このカは台所の汚水が貯められた下水溜や、これにつづく下水溝のなかに棲んでいたポーフラが成虫になったもの。下水溜がなくなり、下水溝もふたがされ、暗渠になった現在は、家畜舎、とくに鶏舎の排水路や、下水が混入している水田などにその棲み場所を変えてきている。

ウシ小屋やブタ小屋などの家畜舎へ飛来している種類は、さきに述べたアカイエカのほか、コガタアカイエカとシナハマダラカが圧倒的に多数を占めている。この2種のカは、水田・用水路・池・沼など比較的広い水域を幼虫の生息場所としている(表3)。また、家畜の放牧地や水田の耕起した土の表面、あるいは休耕田などにできる一時的な水たまりを主な発生場所としているキンイロ

表3 家畜舎周辺水域での力発生状況 (農水省畜試: 1968)

発 生 源	形 状 (横×縦×高さcm)	カ 種 名	発 生 状 況
湧 水(1)	不 定 形	ア カ イ エ カ コ ガ タ ア カ イ エ カ ト ラ フ カ ク イ カ キ ン イ ロ ヤ ブ カ	+ ++ + +
湧 水(2)	不 定 形	コ ガ タ ア カ イ エ カ	+
湧 水(3)	不 定 形	コ ガ タ ア カ イ エ カ	+
豚 舎 汚 水 処 理 装 置	活 性 汚 泥 式 実 験 プ ラ ン ト, ば っ 気 槽 (120×80×50)	コ ガ タ ア カ イ エ カ	+++
豚 舎 下 水 溜	コ ン ク リ ー ト (40×40×60)	ア カ イ エ カ オ オ ク ロ ヤ ブ カ	+ +
豚 舎 水 飲 場	コ ン ク リ ー ト (100×50×50)	ア カ イ エ カ	+
場 周 辺 水 田(1)		ハ マ ダ ラ イ エ カ コ ガ タ ア カ イ エ カ シ ナ ハ マ ダ ラ カ エ セ シ ナ ハ マ ダ ラ カ キ ン イ ロ ヤ ブ カ	+ + + + +
場 周 辺 水 田(2)		コ ガ タ ア カ イ エ カ	+
場 周 辺 下 水 溜	コ ン ク リ ー ト (40×40×60)	ア カ イ エ カ	++

(幼虫及び蛹数 - : 0, + : 1 以下, ++ : 2~9, +++ : 10以上)

農業・農村生活と共に変わる衛生害虫

ヤブカも家畜舎にかなり多数飛来する(表4)²⁾。このほか、竹やぶ・草むら・墓地などで、明るい時に刺しにくる敏捷な、しまのあるカはヒトスジシマカで、竹の切株、投げすてられた空き缶やポリ容器、墓の花立などにたまった水から発生する。

農村にあるいろいろな水域から発生しているこれらのカは、雌が人や家畜を吸血して卵を育て、繁殖している。吸血の対象は主として哺乳類と鳥類であるが、まれにはヘビ・カエル・魚類なども吸血源となる⁹⁾。カは種類によって異なった吸血嗜好性をもっている。一般にアカイエカはニワトリなど鳥類を、コガタアカイエカやシナハマダラカ、キンイロヤブカは、ウシやブタなど大動物を好んでいる(表4)。そして、人間はそのつぎの順位で選択されるようである。

吸血した雌カは4～5日後、卵が完熟すると卵

を抱いて飛びながら、幼虫の生育に適した水域を確かめて産卵する。アカイエカやコガタアカイエカでは100個前後の卵を1つの舟形にまとめて産み、ヤブカの種類では、容器や土が水と接する辺に1個づつばらばらに産みつける。

このように各種のカは、それぞれの好みの幼虫生育場所(発生源)と吸血する動物(吸血源)をもっている。このため、水田地帯でブタの多頭飼育をしている所では、水田などを発生源とし、ブタに嗜好性の高いコガタアカイエカ(図2)・シナハマダラカ・キンイロヤブカなどが非常に多くなる。また、畑地帯の畜舎では、家畜汚水の排水路やマンホールなどを発生源とするアカイエカや、土の表面にできる水たまりを発生源とするキンイロヤブカの比率が高くなる(表4)。

これらカの発生の時期は、越冬のしくみや場所などによって異なるが、東京周辺地域では、ヤマ

表4 家畜舎内でのカ採集状況
志木市農家(水田地帯:1970:3回採集)

カ 種 名	豚 舎					鶏 舎				
	採集数	採集率 %	雌カ率 %	吸血率 %	抱卵率 %	採集数	採集率 %	雌カ率 %	吸血率 %	抱卵率 %
ハマダライエカ	1	0.0	100.0	0	0	0	0	—	—	—
アカイエカ	2,216	15.9	86.9	8.3	21.9	623	31.5	73.4	15.3	53.4
コガタアカイエカ	3,784	27.2	99.7	55.9	0.3	494	25.0	99.6	7.3	1.6
シナハマダラカ	7,562	54.3	99.4	60.4	0.1	788	39.9	99.5	0.4	0.0
キンイロヤブカ	286	2.1	100.0	61.9	1.4	72	3.6	97.4	8.5	0.7
オオクロヤブカ	63	0.5	54.0	35.3	0	0	0	—	—	—

青梅市都畜試(畑地帯:1972:30回採集)

カ 種 名	豚 舎					牛 舎				
	採集数	採集率 %	雌カ率 %	吸血率 %	抱卵率 %	採集数	採集率 %	雌カ率 %	吸血率 %	抱卵率 %
カラツイエカ	31	0.1	96.8	26.7	43.3	3	0.0	100.0	0	0
ハマダライエカ	24	0.1	91.7	4.5	59.1	14	0.1	85.7	8.3	0
アカイエカ	9,889	38.8	70.2	11.6	15.1	8,193	35.5	72.2	15.8	11.2
コガタアカイエカ	4,917	19.3	99.9	63.3	4.5	1,809	7.9	99.9	74.7	2.6
トラフカクイカ	104	0.4	93.3	10.3	43.3	21	0.1	81.0	5.9	47.1
ヤマトハマダラカ	1	0.0	100.0	100.0	0	0	0	—	—	—
シナハマダラカ	3,936	15.5	96.7	59.0	0.9	4,467	19.4	99.7	71.2	0.6
エセシナハマダラカ	47	0.2	100.0	53.2	0	90	0.4	100.0	53.3	0
ヒトスジシマカ	3	0.0	66.7	50.0	0	18	0.1	61.1	63.6	18.2
ヤマトヤブカ	93	0.4	100.0	25.8	8.6	205	0.9	67.3	44.9	5.1
キンイロヤブカ	5,503	21.6	99.3	54.2	0.8	3,812	16.6	99.8	72.5	1.0
オオクロヤブカ	916	3.6	90.2	58.5	3.9	4,382	19.0	70.3	46.0	9.9
キンバラナガハンカ	2	0.0	100.0	0	0	0	0	—	—	—

トヤブカが比較的はやく5月上旬頃からはじめ、ついでキンイロヤブカ、アカイエカ、シナハマダラカ、コガタアカイエカの順となり、この間にヒトスジシマカ、オオクロヤブカ、トラフカイカなどが加わるという様相を示す。もっとも遅くでるコガタアカイエカの終息するのが9月末頃である。

5. 農村にいたる主なカとその被害

農村にいたるカについて、

- ① 農村で発生数がきわめて多い。
- ② 人や家畜に吸血あるいは病気媒介などの被害がある。
- ③ 農業にその発生要因がある。
- ④ 農業に制御法の確立が期待されている。

などの点から検討を加えた結果、農村での主要なカはアカイエカ・コガタアカイエカ・シナハマダラカ・キンイロヤブカの4種であると考えられた。

わが国の日本脳炎患者は、昭和23年4,757名、25年5,196名、27年3,545名、30年3,699名、31年4,538名、33年3,900名、36年2,053名、39年2,683名、41年2,017名と、2～3年間隔で多発してきた⁸⁾。しかし、43年以降急速に減少し、56年には、熊本県を中心とした九州地方に18名を数えるにとまっている。

この日本脳炎は、コガタアカイエカがブタを吸血することによって、ブタの間で流行を起す病気である。ブタを吸血する沢山のカのなかに、日本脳炎ウイルスを保有する1匹のコガタアカイエカがいると、そのブタはこの病気に感染する。そし

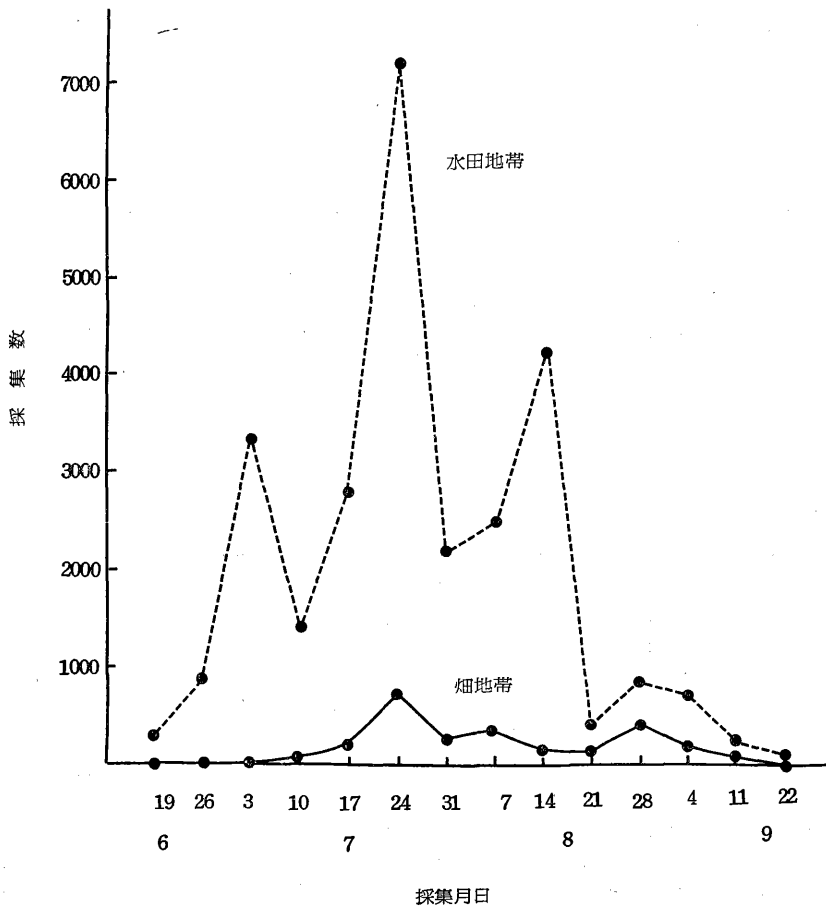


図2 水田地帯（志木市農家）及び畑地帯（青梅市都畜試）豚舎でのコガタアカイエカの採集状況（1973）

て数日後には多量のウイルスを血液の中におくりだすようになる。このような状態のブタを吸血したコガタアカイエカは、そのすべてが血液とともにウイルスをとりこみ、日本脳炎感染カとなって、つぎのブタに感染させ増幅を重ねてゆく¹⁸⁾。この感染経路のなかに人が組みこまれると、つまりウイルス感染したコガタアカイエカに人が吸血されると、その人は日本脳炎を発病、あるいは潜在患者となる。日本脳炎の場合には、この病気に感染している人をコガタアカイエカが吸血をしても、そのカが他の人や動物にこの病気をひろげることはない。

カによって起る病気は、このほかアカイエカによるフィラリア症、ハマダラカ属のカによるマラリア症などがあり、また、キンイロヤブカでは、ブタの死産をもたらしゲタウィルス・アカパネウィルスの媒介が指摘されてきている。フィラリア症は、アカイエカのほか各種のカにより媒介されるが、わが国では、人の病気としてはほとんど根絶された。しかしヌではフィラリア症の罹病率はかなり高く、アカイエカとともにヒトスジマカによる媒介が重視されている。また、マラリアは戦中熱帯地域に進出した日本人の間に大きな被害をもたらしたが、現在もなお、これらの地域では大きな問題となっている。そして、30数年前のこの病気が再発したとか、流行地で感染した旅行者が、帰国後発病した例が近年新聞紙上ににぎわしたりもした。

カによって媒介されるこれら人畜共通伝染病は、いずれも減少はしているものの、流行の芽胞は残存されていることから考えると、媒介カに対する留意を怠ることはできない。

6. 農業技術の変化とカの制御

さきにも述べたように、日本脳炎は昭和43年に降わが国では患者数が年毎に減少してきている。そして、その流行はほとんど九州地方に限られるほどになった。これはワクチンの普及、ブタに対する予防対策などによる効果も大であるが、なんといっても、この病気を媒介するコガタアカイエカの減少が最大の原因といわれている。上村氏ら⁴⁾によれば、コガタアカイエカのこのいちじるしい減少は、数々の農業技術、土地利用の変化が

複合された結果によると報じられている。富山県の事例では、稲作慣行が機械化し、除草剤の施用により節水栽培となる一方、水田転換による休耕田の改良、転作、宅地化が積極的に行われたことにより、コガタアカイエカの幼虫の生息場所が限られた。そして、病気の増幅動物であるブタの飼育は、畜産公害をさけるため山地へ移転された。さらに多頭化による飼育環境の改善、家畜舎へ飛来したカを捕獲するライトトラップの義務化などによって、カの吸血一産卵一吸血という生殖サイクルが分断されたことが要因としてあげられている。

農業技術はさらに進展し、変化してゆくことは必然であるが、この変化がつねにコガタアカイエカなど農業生産の過程で生ずる多くのカの発生防止に向っているという保障はない。近年、イネの病虫害防除のための薬剤が空中散布されるにあたって、その薬剤形態が粉剤から微粒剤へ、そして液剤に変わってゆく傾向がみられる。液剤を空中散布した場合、薬剤はイネの葉に付着はするが、根元や水面には達しにくい。これでは水中にいるカの幼虫の同時防除は望めない。また、イネの品種が特選米の嗜好が強いことから、早生種から晩生種に移行しているの、湛水期間の延長やカの発生時期との合致など、懸念される状況もではじめている。

また、わが国の農業技術が東南アジアをはじめとする開発途上国へ積極的に導入されている。イネの多収穫技術、蛋白質資源としてのブタの多頭飼育などが指導されるなかで、日本脳炎あるいはマラリアなどを媒介するコガタアカイエカやハマダラカ属のカの急増を招くことのないような十分な配慮が望まれる。日本脳炎は、日本にだけある病気では決してない。韓国・台湾・タイ・ベトナム・インドなどアジアにひろく分布する。そして、この病気を媒介するコガタアカイエカ、また媒介の可能性をもったその他のカもかなり多く、これらの地域で生棲していることを忘れてはならない。

引用文献

- 1) 林晃史、篠永哲：ハエー生態と防除一文永堂 1979
- 2) 池内まき子：農技研報告・H (53) 1980

- | | |
|--|---|
| 3) 伊戸泰博：農技研報告 H (39) 1969 | 11) 大塩行夫, 池内まき子, 前田昭二：衛生動物
13 (4) 1962 |
| 4) 上村清, 渡辺護：防虫科学 38 (4) 1973 | |
| 5) 国井喜章, 池内まき子：農技研報告 H (11)
1954 | 12) 大塩行夫, 池内まき子：衛生動物 14 (1)1963 |
| 6) 松村雄：農技研専門別総括検討会議報告 昭50
農業経営部門 1976 | 13) 大塩行夫, 池内まき子：衛生動物 15 (2)1964 |
| 7) 松村雄：農技研専門別総括検討会議報告 昭52
農業経営部門 1976 | 14) 大塩行夫, 池内まき子：衛生動物 15 (3)1964 |
| 8) 三浦悌二：神経研究の進歩 11 (2) 1967 | 15) 大塩行夫, 池内まき子, 前田昭二：衛生動物
16 (1) 1965 |
| 9) 宮城一郎：熱帯医学 14 (4) 1972 | 16) 佐々学：日本の蚊 DDT協会 1956 |
| 10) 大塩行夫, 池内まき子：農技研報告 H (24)
1960 | 17) 佐々学, 緒方一喜：衛生害虫 岩波書店 1960 |
| | 18) 高橋三雄：神経研究の進歩 11 (2) 1967 |
| | 19) 和田芳武：衛生動物 20 (1) 1969 |

日本農村生活研究会会則

- 第1条 本会は日本農村生活研究会と称する。
- 第2条 本会は農村生活についての研究を行ない、その発達と普及をはかり、農村生活の向上に寄与するをもって目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- 1 農村生活に関する研究の文献及び資料の収集、処理、連絡。
 - 2 会報及び各種の印刷物の発行（機関誌年2回発行）。
 - 3 農村生活に関する研究及び調査。
 - 4 研究会、講演会、研究会集會等の開催。
 - 5 その他必要なる事業。
- 第4条 本会は事務局を農業研究センター農業計画部におく。
- 第5条 本会は地方の実情に応じて支部をおくことができる。
- 第6条 本会の会員は正会員、賛助会員とする。
- 1 正会員は本会の目的に関心を有し、会費を納入したものの。
 - 2 賛助会員は本会の目的に関心を有し、会費年額1口以上を納入したものの。
 - 3 正会員および賛助会員の会費額の変更は総会の決議を必要とする。
- 第7条 本会に入会しようとするものはその年度の会費を添えて所定の手続により書類を提出し、委員会を経て会長の承認を受けるものとする。
- 第8条 本会に次の役員をおく。
- 会長 1名, 副会長 1名, 評議員 若干名, 監査 2名, 委員 若干名。
- 第9条 役員を選出は総会において行なう。
- 第10条 役員の仕事は次のとおりとする。
- 1 会長は本会を代表し、会務を統括する。
 - 2 副会長は会長を補佐し、会長が事故あるときはその職務を代行する。
 - 3 評議員は評議員会を構成し、会長の諮問により重要な会務について審議する。
 - 4 委員は委員会を構成し本会の運営にあたる。
 - 5 委員会は互選により常任委員を選出し、一般会務を処理せしめることができる。
 - 6 監査は本会の経理を監理する。
- 第11条 役員の仕事は2カ年とする。但し、重任はさまたげない。
- 第12条 本会は顧問をおくことができる。
- 第13条 本会の経費は、会費、寄付金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第14条 本会の総会は会長の発議により年回1開催する。
- 第15条 本会則の改正は総会の決議により行なう。
- 第16条 本会の会計年度は毎年10月にはじまり翌年9月におわる。
- 第17条 本会則は昭和56年10月1日より施行する。
- 附 則 本会会務の運営は委員会において別に定める細則により行なう。
- 了解事項 評議員は当分の間委員会の推薦にもとづき会長が随時依頼し、総会の承認（事後）をうけるものとする。